

という。次は、どんな切り口でサハリンを語ってくれるのだろうか。

梯氏は現在(2020/3/25～)、岩波書店のWEBマガジン「たねをまく」に『天涯の声～プロニスワフ・ピウスツキへの旅』を連載中である。

(たはら・ゆうこ、ウラジーミル・サンギ著『ケヴオングの嫁取り～サハリン・ニヴフの物語』群像社ほかの訳者)

## 「梯号」に乗って再びサガレンへ

菅原 三栄子

五年前「サハリン国境モニターツアー」に参加。その後日常に戻り記憶も朧げになる中『サガレン』に出会った。

著者梯久美子氏は2006年『散るぞ悲しき 硫黄島総指揮官・栗林忠道』で大宅壮一ノンフィクション賞受賞という快挙をとげ、その後『狂うひと「死の棘」の妻・島尾ミホ』では三賞同時受賞という偉業。(あのミホさんにこんなに迫り粘り強く取材出来たなんて)「この人は凄すぎる！大物だ！」と大ファンになった。であるからして、それと「梯号」に乗り込み再びの旅に出る。出会うは神沢利子、津島佑子、宮沢賢治、チャーホフ、ニヴフなど先住民族。会いたかった人ばかりだ。トイジという古代人や、農業学者ミツリー、鉱山技師ラパーチンも初の出会い。

日々コロナ禍で萎縮の身体と心を解放してくれた。

本作は実に行き届いた書き振りと展開であると一読して感じた。紀行文でありながら文学書でもある。謎が次々出てくる。不思議という大げさではなく楽しげに出てくる。

サハリン号の謎、昔乗った北斗星の謎、ツンドラの謎、林芙美子が国境観光を取り止めた謎…etc. 一つ一つに思い馳せ考察し推理する。人柄の良い「梯号」は焦らしたりせず帰国後古書や諸々の方法でテキパキ早めの謎解き。地図マニア、鉄道ファンを自認の面目躍如の解明も見事である。(「青森挽歌」はどこで書かれたかの謎をいともあっさりと)

しかし簡単に解けぬ謎もある。

第二部「賢治の樺太」をゆく。こちら辺から「梯号」はパワー全開。本領発揮。

一つ目の謎は、賢治の旅はトシの魂の行方を追う旅だったのか。二つ目の謎は白鳥湖に行ったのか行かなかったのか。丁寧に賢治の足跡を追って2017年から三年連続でサガレンを旅し、詩と文章を存分に引用しつつ考察。研究者の論も紹介し、ゆっくり賢治の心象風景に光を当てる。この辺り私は多く語るのはよそうと思う。とてもいい処です。どうか是非本書を手にし、自身で賢治やトシや梯さんを感じ受けとめてほしい。(旅の持つ光と闇をも)

最後に食いしん坊芙美子を買ったというロシアパン。あの白秋もロシアパン屋の家を訪れる話へと続き「樺太のポーランド人たち」の見出しで四頁にわたり協会会員必読の部分が記述されている。ムロチコフスキーを探す著者は、報告集『ポーランドのアイヌ研究者ピウスツキの仕事』(北海道ポーランド文化協会ほか刊)にたどり着き、その中の「樺太のポーランド人たち」で彼を見つけ出した。さすが梯久美子さん。さすがポ文協である。

さあ、読み終えたあなた。書を捨てず旅に出よう。「梯号」に乗って「サガレン」に行こう！

(すがわら・みえこ、詩人)

『熱源』の風をうけて

## 千徳太郎治の生涯

本田 和義

直木賞受賞『熱源』に、私の曾祖母の弟・千徳太郎治が描かれて、世の中に多少なりともその存在を知って頂けたことは嬉しい限りです。千徳太郎治について、親戚には知ってほしいと思い、資料収集を始めました。今回この機会を頂き、協会の皆様にも千徳の生涯を知って頂けると幸いです。

千徳太郎治は、明治5(1872)年11月13日樺太東海岸栄浜領内淵で誕生しました。父は秋田県鹿角出身の元南部藩士「千徳瀨兵衛」、母は樺太内淵出身の樺太アイヌ「タラトンマ」。

慶應3(1867)年父瀨兵衛は鹿角に幼い長女(私

の曾祖母)と長男を残し箱館へ、翌年には岡本監輔に従い樺太に渡航しました。明治2(1869)年に栄浜詰となり内淵に家屋を建て、この頃タラトンマと知り合い事実上の結婚をしました。この時瀨兵衛32才、タラトンマ16才。明治4(1871)年2月17日女子トク、翌年太郎治が誕生。瀨兵衛は新しい家族が出来たことから、帰農願・樺太内淵永住願を樺太支庁に提出し、秋田県鹿角に残した子供や親族と決別し、樺太に骨を埋めるつもりだったようです。

明治8(1875)年の樺太・千島交換条約により、



瀬兵衛は家族の他タラトシマの母、兄そして親族4名を引き連れて樺太アイヌ八百数十名と共に北海道宗谷に移住、翌年6月に樺太アイヌ 854 名と共に小樽を経由して対雁村へ強制移住となりました。

移住後、父瀬兵衛は明治 13(1880)年2月に対雁・江別両村の初代戸長(首長)となり、太郎治は同年6月対雁学校に入学し、日本語教育を受けました。2年前に入学した山邊安之助は、自著『あいぬ物語』の中で太郎治のことを「字を書くことも、書物を読むこともよく出来て、殊に手紙を書くことなどは至ってじょうずである」と書いています。太郎治の文才を開花させたのは、学校の教育の他、父瀬兵衛の教育がより多く影響を与えたと思われます。

太郎治が対雁学校を卒業した明治 17(1884)年には、父瀬兵衛は現在の江別市街に転居し、明治 20(1887)年過ぎには、太郎治一家は石狩来札へ、瀬兵衛は小樽に転居し、別居状態となっています。この頃、太郎治は樺太アイヌとして生きて行くことを決断したようです。現在も続いている、アイヌに対する差別や偏見により、和人の社会で生活することは、やはり困難であったことは否定できません。

明治 26(1893)年 11 月、太郎治は対雁村の遠藤八右衛門(アイヌ名ハシトエク)三女アエカルシマと結婚し、明治 28(1895)年8月には、父瀬兵衛と別れ、家族と共に樺太に帰島しました(太郎治の姉トクは瀬兵衛の家に残りました)。父瀬兵衛は、明治 20 年頃までに対雁の土地数万坪を売却し、財を成していたようで、太郎治一家の樺太帰島に対し、援助したと思われます。

樺太に帰島後の数年間については、太郎治に関する資料が殆ど無く、どの様な生活をしていたかは不明ですが、先に帰島していた山邊安之助と、連絡を取り合っていたと思われます。

明治 35(1902)年秋から冬に、太郎治に大きな影響を与えた人物、ブロニスワフ・ピウスツキと出会いました。明治 35~36(1902~03)年、太郎治はピウスツキにロシア語を習いながら、識字学校で教師を務めました。明治 36 年 6~9 月に、ポーランドの民族学者シェロシエフスキの北海道アイヌ調査に、通訳としてピウスツキと共に参加し、白老・平取で調査を行いました。明治 36~37(1903~04)年、太郎治はピウスツキと共に、識字学校でロシア語による教育を行い、その中でキリル文字(ロシア語文字)を使用してアイヌ語の文章を記していました。

明治 37(1904)年2月に日露戦争が始まり、明治 37~38(1904~05)年には識字学校は開かれず、太郎治は、内淵を含め六村で、巡回教師として活動しました。この時、巡回教師としてサハリン島知

事より月 12 ルーブル受け取っています。なお、この識字学校の生徒の一人として、明治 22(1889)年生まれの太郎治の弟、政治郎の名前があります。

日本国籍の太郎治は、日露戦争中の立場は微妙で、ロシア軍の通訳をする一方、裏面では日本軍に協力していたようです。明治 38(1905)年4月 20 日付で、太郎治一家はロシア国籍を取得し、戦争終了までの数カ月間は、二重国籍の状態でした。少数民族である樺太アイヌが戦争を生き延びるための、試行錯誤の末の決断だったのででしょうか。

日露戦争後、太郎治は樺太を離れ日本に滞在中のピウスツキにキリル文字によるアイヌ語の手紙を3通送っていますが、ピウスツキが日本を離れた後、二人の接点は途切れた状況となりました。しかし後年太郎治が樺太アイヌの教育者・学者・知識人と評されたのは、ピウスツキのロシア語教育の他、民族学を含めた博物学の教育の賜物と思えます。

太郎治は戦争後、内淵で渡船業にて生計を立てていたようですが、教育に対する熱意は持ち続けており、大正元(1912)年内淵に教育所が開設されると教師として復帰しました。さらにこの時期に内淵の総代も兼任し、民生面でも村に貢献しました。

大正 10(1921)年樺太庁豊原支所 10 カ村にアイヌ集落が集住することになり、内淵の教育所は廃止となり、太郎治は教師を退任しました。この 10 年間に妻アエカルシマが大正2(1913)年5月、母タラトシマが大正 10 年4月に樺太で、姉トクが同年8月に北海道積丹で亡くなりました。太郎治は再婚し、先妻と後妻の子供5人は第二次世界大戦後、樺太から北海道に家族と共に移住しております。

教師を退職した太郎治は、ピウスツキの影響もあり、樺太アイヌの伝統・歴史・語彙などを後世に残すことを考えたようです。昭和4(1929)年8月 10 日、東京の市光堂市川商店より『樺太アイヌ叢話』を出版。これは民族誌・地誌の範疇に入る本で、続けて 10 月にはアイヌ語辞典が出版の予定でしたが、出版されず、その原稿も行方不明のままです。

太郎治は『樺太アイヌ叢話』が出版される 10 日前に急死しました。享年 56 才。

【千徳太郎治樺太栄浜郡栄浜村大字栄浜字北踏辺番外地にて昭和4年7月 31 日午後 9 時 30 分死亡届人山邊清之助(太郎治の弟)】

今後、千徳太郎治や樺太アイヌのこと、樺太の歴史・対雁の強制移住のこと、ピウスツキのことなどを、より多くの人々に知って頂けるよう、微力ですが活動を続けたいと思っております。

(ほんだ・かずよし、樺太アイヌ協会賛助会員)

=写真=千徳太郎治、『樺太アイヌ叢話』より